

李光洙の第二次留学時代

——『無情』の再読(上)——

波 田 野 節 子

【要約】本稿は、李光洙（一八九二—一九五〇）の長編小説『無情』にあらわれた実体験と創作との関連を考察する準備として、『無情』が書かれた第二次留学時代の李光洙の行動を調査したものである。一九一五年に早稲田大学高等予科に編入した李光洙は、一九一七年に『無情』を発表し、一九一九年に「朝鮮青年独立団宣言書」を起草して上海に亡命した。筆者は以前の論文で、宣言書の内容は李光洙の直前の著作の立場とかけ離れていると述べた。しかし、そのあと発掘された資料にもとづいて再検討した結果、宣言書は李光洙がこれを起草するまでにいたる行動と主張の総決算であり、彼の立場は一貫していたという結論に達した。

目 次

- (一) はじめに
- (二) 一九一五（大正五）年—五年ぶりの東京—
- (三) 一九一六（大正五）年前半—監視のなかの活動—
- (四) 一九一六（大正五）年後半—『毎日申報』—
- (五) 一九一七（大正六）年前半—『無情』と結核—
- (六) 一九一七（大正六）年後半—輝かしい日々—
- (七) 一九一八（大正七）年—北京への「愛情逃避」—
- (八) 結びにかえて—「朝鮮青年独立団宣言書」—

(一) はじめに

李光洙の小説にはよく類似したモチーフが登場する。これは、李光洙が自己の体験を小説にもりこむ「体験型」作家であつたことを示唆している。⁽¹⁾ この傾向は「無情」を初めとする初期の作品群にとりわけはつきりと現れている。これに注目した筆者は、李光洙が「無情」を書いたところに体験したできごとが「無情」にどのようなあらわれ、その後の彼の小説にどう影響したかを解明したいと考えた。紙数の制限があるために、本稿では李光洙の留学時代の体験を考察するにとどめ、別稿で体験と創作との関連を検討したい。大学の学籍簿、留学生たちを監視していた内務省警保局の記録、留学生雑誌「學之光」、朝鮮で刊行されていた雑誌「青春」と新聞「毎日申報」、

この時期の日本の新聞などを総合的に検討して、できるだけ詳細かつ具体的に李光洙の留学時代を考察する。⁽²⁾

李光洙が初めて日本に来たのは一九〇五(明治三八)年の夏で、第二次日韓協約が結ばれる数ヶ月前のことだつた。一九一〇(明治四〇)年三月に明治学院普通部を卒業した李光洙は、故郷定州にある五山学校の教師となり、日韓併合をはさんで三年半をそこで送つたあと大陸放浪の旅にでる。上海とウラジオストクをへて、一九一四年二月から八月までチタに滞在して同胞新聞に記事を書くなどしていたが、八月にロシアが第一次世界大戦に参戦すると五山にもどつた。このとき、彼はふたたび東京に留学することを心に決めていた。⁽³⁾ 以下、李光洙が再度東京に来た一九一五年から上海に亡命する一九一九年初めまでの行動を時間の順序にそつて見ていくことにする。

(二) 一九一五(大正五)年 — 五年ぶりの東京 —

李光洙が東京に着いたのが一九一五年のいつごろだつたかは不明である。⁽⁵⁾ 十八才で東京を離れた彼はいまや妻

子ある二十三歳の青年になつていた。⁽⁶⁾ この五年のあいだに日本では多くの変化があつた。まず、明治天皇が亡くなつて年号が大正にかわつていた。この年十一月には大正天皇の即位大札の儀(即位式と大嘗祭)がとりおこなわれ、民間でも奉祝門を作るなど祝賀行事が盛んにおこなわれた。連日のように写真入りで報道される盛大な行事の記事を読みながら、李光洙は時代の変化を実感したことだろう。

このころ日本経済は好調期に入つていた。日露戦争からずっと慢性的な不景気に苦しんできた日本経済は前年に勃発した大戦のおかげで不景気を脱し、この年の夏から好景気に突入したのである。株式が暴騰し、年末の株式市場は空前の活況を呈する。政治面では、大正初めの憲政擁護運動と大正政変をへて民衆の政治意識が高まり、吉野作造や茅原華山が「民本主義」を提唱するなど、⁽⁷⁾ いわゆる大正デモクラシーの時代がはじまつていた。

文学界では白樺派の作家たちが若者の心をとらえていた。自己を生かすことがそのまま人類の意志の実現だとして個人のなかにひそむ可能性^{II}天才を伸ばすよう主張する白樺派の主張は、李光洙にも大きな影響をあたえた。そして平塚らいてうを中心に「青鞥」に集つた女性たちは、マスコミの攻撃に対して自ら「新しい女」を名乗つて反撃し、世間の耳目を集めていた。平塚は奥村浩と堂々と「共同生活」をはじめ、一九一六年には大杉栄と神近市子の日陰茶屋事件が起きる。また島村抱月がひきいる芸術座では松井須磨子が「復活」のカチューシャを演じて人気を集めていた。このような女性の新しい生き方に李光洙が関心を示したことは、「無情」の主人公李亨植に日本の「女の博士」に言及させていることにもあらわれている。「女の博士」のモデル原口鶴子は、平塚らいてうと日本女子大英文学部の同級生であり、日本女性として初めてアメリカで博士号を得た人物である。彼女は夫の協力をえて母になつたあとも研究をつづけ、新しい夫婦のあり方として社会の注目を集めた。⁽⁸⁾

このように東京では多くの変化が起きていたが、なによりも李光洙が痛感したのは祖国の国権喪失による変化だつたと思われる。前は外国留学だつたのが今では「内地」留学であり、彼は朝鮮総督府の留学生監督に監督さ

れる立場だった。保護条約締結後におかれていた学部留学生監督部は併合にもなつて朝鮮総督府の所屬となり、監督の一人は日本人憲兵大尉であつた。⁽⁹⁾留学生たちがここに集まつて刊行していた『大韓興学报』は廃刊となり、大韓興学会も解散させられた。その後、留学生たちは朝鮮留学生学友会を組織して活動拠点を神田小川町の東京朝鮮基督教青年会館にうつし、機関誌『學之光』を刊行していた。朝鮮総督府の留学制限方針のために、留学生の数は併合前から見ると半減していたが、それだけに彼らの使命感は強く、新入生歓迎会、忘年会、新年会のほか、頻繁に演説会を開いて民族意識をさかんに鼓吹していた。この年の十月には李光洙も恒例の新入生歓迎会に出て歓迎されたことであらう。⁽¹²⁾

併合前は、文学に関心をもつ留学生は李光洙と洪命憲と崔南善の三人くらいだったが、この時期になると草創期の若い文学者たちが多く東京に来ていた。一九一〇年に崔承九(慶應大学予科)、一九一二年に田榮澤(青山学院)と廉想渉(翌年、麻布中学に入学)、一九一三年に羅憲錫(女子美術学校)と朱耀翰(明治学院中学)、一九一四年には金興済と玄相允(ともに早稲田大学高等予科)、そして金東仁はこの年に東京学院中学に入学して翌年明治学院に移っている。⁽¹⁴⁾李光洙は一九一五年に東京に来てまもなく羅憲錫と兄の羅景錫と知り合い、それが彼の創作モチーフに影響を与えることになるが、これについては別稿でくわしく取り扱いたい。

留学生たちの気質も併合前とは変わってきていた。『學之光』のある記事は、併合前に日本に来ていた留学生を「下手な大工」「藪医者」、いまの留学生を「能力ある大工」「名医」にたとえ、以前とちがつていまは熱心に勉強する実力主義の風潮が強いと書いている。⁽¹⁵⁾実際、この時期になると以前のような外国人としての特別扱いではなく、日本人に負けない成績をとって互角の競争で特待生に選ばれる留学生が出るようになった。李光洙も一九一七年に特待生となっている。

李光洙は九月三〇日に早稲田大学高等予科の文科二期(当時の予科は三期制)に編入学したことが学籍簿で確

認される。保証人欄には留学生監督の徐基殷の名前が記載されている。このころ監督部には留学生のための寄宿舎があり、⁽¹⁷⁾李光洙も「無情」を書いて一九一七年一月半ばにはこの寄宿舎にいたことが短編「彷徨」の末尾に記された執筆日と執筆場所によつて推定される。しかし学籍簿には「牛込本村町15番地島田方」と「四谷区片町18番地高木方」の二つの居住地が記載されているので、入学時には寄宿舎でなく下宿に入つたことがわかる。最初の下宿は、麴町中六番町の監督部から外濠を越えて左にしばらく歩いたところであり、陸軍士官学校の近くで外濠に面した角地だった。つぎの下宿はそこからもう少し西の陸軍幼年学校横手の崖下で、現在は外苑通りの曙橋の下になっている。⁽¹⁸⁾『學之光』八号(一九一六年三月発行)の奥付には編輯兼発行人李光洙の住所としてここが記載されている。いつ下宿を移つたのかは不明だが、冬休みに下宿代を節約するために寄宿舎に入り、新学期が始まるとまた新しい下宿に入つたとも考えられる。東京に来た李光洙は、これらの下宿に住みながら旺盛な活動をおこなうことになる。

(三) 一九一六(大正五)年前半 — 監視のなかの活動 —

李光洙はまず申翼熙や秦學文らと計り、現代朝鮮の諸問題を研究する目的で朝鮮学会を立ち上げた。⁽¹⁹⁾一九一六年一月二十九日に開かれた第一回例会では、李光洙が農村問題について発表したが、このときに発表した内容が、『學之光』八号(一九一六年三月四日発行・押収)に掲載された李光洙の論説「龍洞(農村問題) 關實例」だったと思われる。『龍洞』の筆者名は、本文では帝釈山人、目次では劉天(白衣)となっている。しかし「龍洞」とは李光洙が五山学校時代に校主の李昇薫に頼まれて生活改良運動をおこなった村の名前であり、文末に記された執筆日付(一月二十四日)が例会の五日前であることから、そのように推測される。⁽²²⁾李光洙がこの翌年十一月から『毎日申報』に二ヶ月間連載した論説「農村啓蒙」は、この論説を発展させたものである。⁽²³⁾

このころ李光洙たち朝鮮人留学生はつねに監視されていた。一九一七年に内務省警保局保安課が作成した資料によれば、一九一六年末に日本にいた朝鮮人五、六二四名のうち四八五名が留学生で、うち三九一名が東京に住していた。一九一七年末に警保局が「排日思想」の持ち主として認定した二三七名のほとんどが学生であり、李光洙は要監視度が高い「甲号」八三名の一人として指定されている。⁽²⁴⁾

もちろん刊行物もきびしい検閲をうけた。留学生雑誌「學之光」は、李光洙が留学前に投稿した論説「共和國の滅亡」が載った五号（一九一五年五月二日発行）をはじめとして、この一九一六年には七号（一月二十一日発行）、八号（三月五日発行）、九号（五月二十三日発行）とたてつづけに押収されている。⁽²⁵⁾「學之光」編集者たちは原稿募集要領で内容を「學術方面」に限定し、「激烈な言葉は一切避ける」よう呼びかけて細心の注意をはらったが、そのかいもなく会誌は連続して押収された。原因となった箇所すら教えてもらえず、困り果てた彼らは極秘に対策会議を開いたが、そこで誰が何を話したかまでもが記録されているほど当局の監視は徹底的だった。⁽²⁶⁾

当時はいったん印刷された雑誌を差し押さえるという方法がとられていたので、原本が押収をのがれることもあった。現在、五号は影印本に入っており、八号も最近発見されている。⁽²⁷⁾李光洙が編輯兼発行人をつとめた八号には、彼の論説「龍洞」(살아라(生きよ))、短編「크리스마스밤(クリスマスの夜)」、詩「어린 벗에게(幼い友へ)」が掲載されているほか、「社会短評」も文体や執筆日付の書き方から見て彼の作ではないかと思われ、この時期の李光洙の活動の旺盛さをうかがわせる。七号と九号が発見されれば李光洙の作品があらたに確認される可能性は高いはずである。

ところで八号に掲載された論説「살아라」は、その一ヶ月前に李光洙がおこなった演説と同じ内容だと推測される。官憲資料によれば、李光洙は一九一六年一月二十二日(朝鮮学会で農村問題について発表する一週間前

ある)に青年会館で開かれた学友会主催の雄弁会で、「我ハ生ルヘシ」(官憲資料の日本語訳タイトル)という演説をしている。タイトルの類似や掲載時期から見、執筆中の「살아라」の内容を壇上で語ったのが「我ハ生ルヘシ」ではなかったかと思われる。⁽³⁰⁾ところが、この演説記録と論説の二つを比較してみると論調が違っていることに気づく。論説「살아라」が、よりよい生存を求める欲望が文明と富の原動力であるという、この時期の李光洙がおこなっていた主張を一般論として述べたものであるのに対して、演説の方はより具体的に激烈である。欲望が引き起こす生存競争のなかで日本人がぞくぞくと朝鮮半島に殖民する一方で、朝鮮人は半島を背にして異郷でさまようという惨めな状態にある。だが日本は朝鮮に権力も自由も与えようとしない。これがどうして黙視に耐えようかと慨嘆しながら日本を批判している。⁽³¹⁾論説では検閲を意識して抑制した書き方になり、一方演説では会場の熱気に押されて胸の奥の思いを吐露したためにこの落差が生じたのだろう。

こうした落差は、媒体が同じであっても、実名で書くか匿名で書くかの違いによって生じることもある。この年、茅原華山の主宰する雑誌「洪水以後」⁽³²⁾三月号に、李光洙が「孤舟生」の筆名で書いた「朝鮮人教育に対する要望」という投稿文が掲載されている。李光洙は、日本と朝鮮の教育制度の違いを具体的な数値をあげて指摘し、もし日本が言葉で言うように真に朝鮮人の「幸福」と「同化」を望んでいるのなら、いまや日本人と同じく「天皇の赤子」である朝鮮人に対して内地と同じ教育制度のもとで同程度の教育を施すべきだと、日本が主張する「同化」の論理を逆手にとって完全平等を鋭く要求をしている。だがこの投稿文には、卒業後に平等の資格を与えてくれれば「朝鮮人は眞に皇恩に浴したるを衷心から感謝するであらう」とか、適当な時期が来たら「朝鮮人にも参政権を附與して完全なる日本臣民の列に加えて貰いたい」、そのための教育は日本語でおこなえばよいなど、見方によっては卑屈とも受け取られかねないような文言が並んでいる。

ところがその翌月、同じ雑誌に今度は匿名で投稿した「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」という文章で、

李光洙は前号とはうってかわって激烈な日本批判をおこなっている。おそらく前の投稿文を書きながら、彼の心の底には日本人の朝鮮差別への怒りが鬱勃としており、それが匿名という条件のもとで噴き出したのだろう。「日本人は朝鮮人もしくは支那人に対し傲慢極まりなきに反し、白人種特に英国人に対する態度の卑屈さはまことに笑止に堪えず」とか、「日本人は啻に朝鮮人を冷遇するのみならず、進みてその職を奪い、その資財を捲き上げて餓死せしめんと努めつつあり。日本人は我々朝鮮人にとりてはあたかも寄生虫のごとし」という「全文殆ど嘲罵的字句」で埋められた文章を、当然のことながら編集部は「其の筋の注目を憚」って掲載しなかった⁽³⁴⁾。自分の書いた文章を人の目にふれさせるためにはそれなりのレトリックが必要なことを李光洙はよく知っていたのだろう。実名の投書文に見られるような、日本の主張を逆手にとって差別の撤廃を要求するというレトリックは、その後、李光洙の公式となる。彼は解放後に次のように回想している。

たとえば、「われわれ朝鮮人の教育機関を作ってくれ」と言いたい場合は、言論人や公職者は「同じ天皇の赤子ではないか、なぜ教育に差別があるのだ」と言わなければ、当時は通じなかった。官公職の朝鮮への制限や差別打破をさげふための公式は、「みんな同じ天皇の赤子ではないか、内鮮一体ではないか、明治大帝の御心ではないか、なぜ内鮮差別をするのだ!」というものだった。(傍点は引用者。『나의告白』⁽³⁵⁾)

李光洙は「余の作家的態度」(一九三二)でも、小説を書くときには「警務局が許すような材料を選んで原稿紙に書きはじめると書いている。⁽³⁶⁾許容された限度内でなければ文章行為そのものが不可能な状況のなかで、李光洙は自分の主張を合法的に読ませるためのレトリックを体得していった。証拠の文字が残らない演説、実名を出さない投稿、あるいは日本の権力が及ばない国外に出たときに彼の文章が激変し、まるで二重人格のようにも

見えることには、こうした事情を考慮しなくてはならない。

七月五日、彼は優良な成績で高等予科を卒業して大学部への進学を決める。⁽³⁷⁾一九一六年前半期の李光洙は旺盛に研究し、著述をし、『學之光』の編集をしながら授業にも真面目に出席していたのである。

(四) 一九一六(大正五)年後半 — 『毎日申報』 —

夏季休暇を妻子がいる故郷で過ごし、九月に大学進学のために東京にもどる途中、李光洙は京城日報社の社長である阿部充家(一八六二—一九三六)と接触した。⁽³⁸⁾阿部との出会いを、李光洙は次のように回想している。

我が初めて無佛翁に御逢ひしたのは大正五年の初秋であつたと思ふ。當時私は、學校の教師を止めて、シベリアの流浪からも歸り、再び早稲田大学に學籍を置いて居た時で、夏休みを終へて東京へ歸る途中、京城に寄つた時のこと、或日朝早く沈友燮君に誘はれて、翁を旭町の寓居に訪れたのであつた。(「無佛翁の憶出(一)」——私が翁を知つた前後のこと⁽³⁹⁾——一九三九)

無佛とは阿部の号である。総督府の御用新聞社である京城日報社は、日本語新聞『京城日報』と朝鮮で唯一の朝鮮語新聞『毎日申報』の二紙を発行していた。⁽⁴⁰⁾発行部数はこのころ『京城日報』が三万五千部、『毎日申報』が二万部強で、四年後の一九二〇年にはそれぞれ七万部と五万部を突破している。⁽⁴¹⁾併合時に寺内総督から京城日報社の経営を依頼された国民新聞の徳富蘇峰は、仕事の関係で韓国に住むことができなかったで、現地常駐の社長をおいて、ときどき訪韓しながら監督していた。国民新聞で蘇峰の右腕として副社長をつとめていた阿部は、一九一三年八月に蘇峰に呼ばれて京城新聞の社長となり、⁽⁴²⁾一九一八年七月、蘇峰の辞任にともなうて退任してい

る。阿部は仏教に造詣が深くて生活は質素であり、日本統治に不満を持つ朝鮮の青年たちと好んで話しあったので、その人格に敬服する朝鮮人は多かったという。⁽⁴³⁾

京城日報社には「京日編集局」と「毎申編集局」の二つの編集局がおかれており、「毎日申報」の編集局を主宰していたのは中村健太郎という朝鮮語に堪能な日本人だった。⁽⁴⁴⁾ 中村は熊本県の朝鮮語留学生として朝鮮に渡り、日本人が発行していた「漢城新報」の朝鮮文主幹や、統監府の翻訳官として新聞検閲の仕事をしているうちに、蘇峰の知己をえて「毎日申報」を主宰することになった人物である。⁽⁴⁵⁾ 李光洙を阿部の家に連れていった沈友燮は「毎日申報」の記者で天風という号をもつ作家でもあり、「無情」の登場人物中友善のモデルとされる。⁽⁴⁶⁾ 彼に連れられて阿部宅を訪れた李光洙は、阿部から「毎日申報」への執筆を請われて承諾し、中村の家を訪れて具体的話をしたのだろう。九月八日の「毎日申報」には「南溪幽屋始逢君」で始まる孤舟生の漢詩「贈三笑居士」が掲載されている。三笑居士は中村の号である。

総督府の御用新聞である「毎日申報」に書くことを、李光洙はどう考えていたのだろうか。先に見たように彼は日本人に対して反感をいだいていたし、この新聞に書けばある人々たちの攻撃的になることももちろん知っていた。⁽⁴⁷⁾ 当然、躊躇したはずである。にもかかわらず彼が「毎日申報」に書いた理由はいくつか考えられる。まず、彼はこのころ自分の文章を発表する場所をもっていなかった。崔南善の「青春」は一九一五年三月に六号を出したきり停刊のままだったし、先述のとおり「學之光」もこの時期あいついで押収されていた。⁽⁴⁸⁾ 書いた文章が人の目に触れないことは、李光洙にとってかなりの痛手だったに違いない。李光洙は同胞を啓蒙したいと望んでおり、また同胞の地位向上を日本に要望したいとも考えていた。総督府の朝鮮語新聞「毎日申報」はその両方の目的のためにもっとも適した言論機関であった。自分の文章で人々の考え方に影響をあたえ、朝鮮の状況を改善させることができると自負していた李光洙にとって、二万部の発行部数をもつ「毎日申報」は魅力的な発表の場

だったことだろう。

もちろん、そこに青年らしい虚栄心と野望があったことは否定できない。しかしながら、まさに青年が名声と富に対する欲望を持つことこそが必要なのだと、このころ書いた小説でも論説でも李光洙は叫んでいた。先述の論説「살아라」と演説「我ハ生ルヘシ」でも生存を求める本能的欲望が文明の原動力であることが大前提とされており、生存競争に負けた朝鮮人の弱さが嘆かれているにすぎなかった。弱いからこそ強くならねばならない、そのためには大きな欲望を持たねばならないというのがこのころの彼の主張だったのである。そもそも彼には、朝鮮に現在おきている変化は基本的には受け入れるべき必然の趨勢であるという肯定的な認識があったと思われる。平安道の貧しい孤児出身だった彼は、自らの社会上昇が、朝鮮で王朝が滅びて両班が没落するという未曾有の大変動の時代に生まれあわせたおかげであることをよく知っていた。日本人の傲慢さや差別意識に対する怒りはそれとは別の問題であった。

そしてもう一つ、彼が「毎日申報」に執筆する動機となったと思われる非常に現実的な理由がある。詳細は次章で述べるが、このころ彼は経済的に逼迫していた。東京に帰ればすぐに秋学期の学費を納めねばならなかった彼にとって、「毎日申報」から入る原稿料はまさに天の恵みであったと思われる。

東京に向かう日、李光洙は阿部に挨拶してから汽車に乗ったようである。李光洙がこのあと「毎日申報」に発表した論説「大邱에서」の冒頭は、「朝、先生とお別れしたあと、終日の雨のなかを大邱に到着いたしました」という文章で始まっている。「先生」とは阿部をさすと思われる。このころ大邱では資産家の家を強盗が襲った事件が発生し、最初は外部の犯行と思われるどころ、まもなく婿と息子が犯人であったことが判明して大きな話題になっていた。⁽⁴⁹⁾ 李光洙はこの事件を分析して、朝鮮の中流青年の不満を取り込むための方策を提言している。提言の直接の相手は「先生」であるが、その背後には総督府が意識されている。官界や教育界、郵便、銀行

などの「高尚で複雑」な仕事は現段階では日本人にまかせ、とりあえず朝鮮人を商店事務員、工場技術者、普通教育の教員などの仕事に使うべきであるという提言は、朝鮮人が現時点において日本人より劣っていることを前提としており、見方によつては卑屈とも受けとられる。しかし、あえてこうしたレトリックを使つてでも、朝鮮人に職業的な知識を習得する機会を与えてほしい、実力養成のために学ぶ機会を与えて欲しいと、李光洙は切実に願つていたのである。

東京にもどつた李光洙は、九月十日に早稲田大学文学部文学科哲学科への入学手続きをとつた。このとき学籍簿に記載された居所「市外戸塚町一五六 浅井方」は、大学からグラウンドの脇を通つて高田馬場駅へ向かう途中である。⁽⁵¹⁾この下宿で、彼は『毎日申報』に発表する論説を書きはじめた。まず九月二十二日から二日間「大邱에서」が掲載され、つづいて二十七日から現代の東京を紹介する「東京雜信」の連載がはじまつた。一カ月半の連載が終わると、翌十一月十日から今度は文学評論「文學이란 何오」がはじまり、その終了二日前から「婚姻論」の連載が、そして、それが終了する四日前の十一月二十六日からは「教育家諸氏에게」と「農村啓発」二つの論説の連載がはじまる。「農村啓発」は翌年の二月十八日まで二ヶ月近く連載がつづき、「教育家諸氏에게」の方は十二月十三日に終わるが、翌日から「朝鮮家庭의 改革」、それが終わるとただちに「早婚의 惡習」がはじまつている。この時期の『毎日申報』にはつねに李光洙の論説が二つか三つ掲載されていたことになる。以前に書きためていたものもあつたかもしれないが、すさまじい執筆量である。

十一月三日には朝鮮学会で「民族性に関する研究」の発表をし、その三日後に論説「為先獸가 되고然後人이 되라」を書きおえて『學之光』十一号に発表している。⁽⁵²⁾この二つは、李光洙がこの時期すでに民族性に着目して優勝劣敗の論理と結びつけて考えていたことをうかがわせる。このように大量の論説を執筆するかたわら、彼が大学の勉強も怠らなかつたことは、翌年の学年末試験でみごとに特待生になつてゐることもわかる。

こうした仕事量の膨大さが彼の体力を消耗させたであらうことは容易に推測される。ようやく冬休みが近づいたころ、今度は新年小説を書くようにという『毎日申報』の電報が飛びこんできた。李光洙は休むまもなく、「冬休み中に不眠不休で約七十回分を書いて送」⁽⁵³⁾ることになる。

(五) 一九一七(大正六)年前半 — 「無情」と結核 —

のちに、この時期をふりかへつて李光洙はこう書いている。

「無情」を書いていたときは今も忘れられません。それは多分、私がひどく苦勞したときのことだつたからだと思います。

そのころ私は空腹のために氣を失うことが何回もありましたし、教科書を買えないのはさておき、授業料を納めることがでずに学校に行けないことが頻繁にありました。(나의 最初の 著書⁽⁵⁴⁾)

李光洙は金性洙から経済援助を受けて留学し、中央学校の学監安在鴻の名義で毎月二十円を受け取つていたといふ。⁽⁵⁵⁾しかし、これは彼が十年前に明治学院に留学していたときの官費給付と同じ額であり、いまやきわめて不十分な額であつた。大戦の影響で好景氣に突入した日本ではインフレーションが起こり、物価の高騰が人々の生活を直撃していた。米価の値上がりに耐えかねた人々が全国で米騒動を起こすのは、この翌年の一九一八年のことである。毎月一定の仕送りで暮らす学生たちは物価高に苦しんだ。明治の終わりに月十円くらいだった下宿料がこのころは五割ほど値上がりしている。⁽⁵⁷⁾九月、一月、五月に三分割して納めねばならなかつた年間五十円ほどの大学授業料もこの時期に上がりはじめる。⁽⁵⁸⁾李光洙はこのあと六月の学年末試験で特待生となつて学費を免除さ

れるが、その前は学費を納めるのに苦慮したことだろう。⁽⁵⁹⁾ ちなみに『無情』の李亨植が一九一六年の夏に京城学校から受け取っていた月給さえ三十五円である。亨植の下宿料は八円であり高くないが、東京の本屋に払い込むプラトン全集の代金は五円もした。⁽⁶⁰⁾ 当時は雑誌が十銭から五十銭くらい、単行本は一円から二円だったから、二十円の仕送りでは教科書代と授業料に困ったのは当然である。先に指摘したように、李光洙が『毎日申報』に執筆した最大の理由は、東京で勉強を続けるには月二十円の仕送りでは無理だったからだと思われる。⁽⁶²⁾ 新聞社からの原稿料は『無情』の連載が始まるころは月五円、連載が終わるころは十円、そして『開拓者』の連載が始まるころは二十円になっていたと、のちに李光洙は回想している。⁽⁶³⁾

一九一七年一月一日から『無情』の連載が始まり、六月十四日まで百二十六回つづいた。筆者は以前書いた論文のなかで、李光洙が冬休み中に不眠不休で書いた「約七十回分」とは、四月初めの掲載になる七二節から四節あたりまでの三か月分だと推定した。このあたりで作品の流れがとぎれているからだ。⁽⁶⁴⁾ 「このような長編を短期間で書きあげることができたのは、孤児として生きてきた筆舌に尽くしがたい自伝的な事実をほとんどそのままの形で作品に流し込んだからだ」という金允植の指摘のとおり、『無情』の少なくとも前半は、彼の内部から流れ出すごく一気呵成に書かれたのである。

それにしても、いくら無理な仕事で衰弱していたとはいえ、二十代の若者が空腹のために何度も失神したという回想の内容は尋常ではない。李光洙の身体がこのころどれほど衰弱していたかをうかがわせる。この時代に栄養不良で過労の苦学生が一番恐れなくてはならない病氣、それは結核であった。彼が一生苦しむことになるこの病氣にかかったのは、『無情』を執筆中のこのころだったと推測される。⁽⁶⁶⁾ 李光洙は肺結核を発病したときのことを次のように回想している。

病氣の始まりは大正六（一九一七）年度、東京からです。（一九二九年「春園病床訪問記」⁽⁶⁷⁾）

私が肺病にかかったのは、いまから十五年前のことです。最初は風邪のように身体がつかうて咳がしきり出るので、医師の診察を受けたところ、意外にも私がもっとも恐れていた肺病という宣告をうけたのです。⁽⁶⁸⁾
（一九三二年「肺病死生十五年」）

秋口から続いた仕事で無理を重ねた李光洙は、『無情』を書くころに発病したのだろう。『無情』の連載が始まると同時に、あれほど活発だった論説の発表が止まっている。「農村啓発」の連載は二月まで続いているが、これは前年中に執筆して送ったことも考えられる。冬休みの終わった一月なかばに「少年의 悲哀」「尹光浩」「彷徨」⁽⁶⁹⁾ 三つの短編を書いているが、それまでに比べて格段のペースダウンである。「彷徨」の末尾には（一九一七、一、一七、東京麹町에서）と執筆の日付と場所が記されており、主人公が留学生宿舍で病に臥していることから、李光洙がこのころ麹町の留学生監督部寄宿舎に移っていたことが推測される。風邪で大部屋に寝ている「彷徨」の主人公は、仲間が登校したあとと深刻な虚脱感に襲われて「僧になりたい」と考える。この「僧になりたい」という同じ言葉を、『無情』の七三節と七四節で、亨植もつぶやいている。おそらく作者の心理が同時に二つの作品に反映したのであろう。このときの李光洙の精神状態が、この時代に「死に至る病」であった肺結核の発病とかわりがあることを強く示唆している。これについては別稿で詳察する。

のちに李光洙と結婚することになる許英肅は、知り合ったときに彼はすでに肺病にかかっていたと回想している。彼女は李光洙との出会いについて幾通りかの回想をしているが、そのなかでもっとも信頼できるのは、周囲の人物や状況まで明確に覚えている次の発言である。

あるとき張徳秀氏、崔斗善氏、玄相允氏、そういう方たちと何かの会議があつて、私も参加して初めてあの人に会いました。会が終わって雑談をしているとき、あの人が私に、肺病には何の薬がよいだろうかと聞くんです。(「春園病床訪問記」一九二九)

張徳秀、崔斗善、玄相允はみな早稻田出身者である。崔南善の弟である崔斗善は一九一七年七月まで哲学科、玄相允は一九一八年七月まで史学科に在学しており、張徳秀は政経学部を一九一六年七月に卒業したが一九一七年二月九日の朝鮮学会公開講演会で玄相允とともに講演した時までは東京にいたことがわかつている。⁽⁷¹⁾ 許英肅が李光洙と知り合ったのは、おそらく一九一六年末から翌年にかけてだったと推測される。このあと許英肅は薬を届けるなどして彼の面倒を見るようになり、それもあつてか李光洙の健康は順調に回復する。まもなく著作活動も再開し、四月二十九日に開かれた校友会主催の新生歓迎会・卒業生祝賀会では祝賀の辞を述べている。⁽⁷²⁾

六月十四日に『無情』の連載が終わった。この時期の行動を時間順に整理すると、李光洙は五月ころには『無情』を完成させ、すぐに中編小説「어린 벗에게」の執筆に入つて、夏休みに朝鮮にもどるときには執筆を終えていたのではないかと考えられる。⁽⁷³⁾ 学年末試験を終えて東京を發つた彼は、朝鮮に向かう汽車と船のなかで紀行文「東京에서京城까지(東京から京城まで)」を書き、「어린 벗에게(1・2信)」といっしよに『青春』九号(七月二十六日発行)に發表した。紀行文のほずむような文体は、このとき李光洙が未来に對していただいたであろう希望と信頼をあますところなく映しだしている。そして、そこにあふれる明るさは、『無情』の最終章の「ああ、我が地は日ましに美しくなっていく」⁽⁷⁴⁾と詠いあげられた明るさと通底する。許英肅のおかげで彼の身体は健康をとりもどしていた。⁽⁷⁵⁾ 待学生になつた彼はもう学費に悩まなくてもよかつたし、『無情』が好評を博して原稿料も入るようになった。そして彼はいま新聞社から民情視察の紀行文を書くよう依頼されて特派員として旅に出る

ところであつた。⁽⁷⁷⁾ 併合六年目を迎えた朝鮮各地の「經濟、産業、教育、交通の發達、人情風俗の變化」を宣傳するのが新聞社の目的だったが、それはまさに『無情』の最終章に描かれた朝鮮の姿——亨植たちが釜山から旅立つたあとすべての面で長足の進歩をとげ、商工業が發達し、大都市には石炭の煙が流れてハンマーの音が鳴り響く、新しい朝鮮の姿のはずであつた。それを視察するために李光洙は「五道踏査」の旅に出たのである。

(六) 一九一七(大正六)年後半——輝かしい日々——

『五道踏破旅行記』の連載は『毎日申報』で六月二十九日から、『京城日報』で六月三十日からはじまつた。同じ作家が日本語と韓国語で連載するという画期的な形式である。李光洙はのちに、『京城日報』に頼まれて全州から先は日本語でも書いたと回想しているが、⁽⁷⁸⁾ 実際には『京城日報』にも第一日目の紀行文から掲載されている。ただし『毎日申報』の最初の二回が『京城日報』の方では一回にまとめられ、朝鮮語文にない内容が日本語文に入つていたりするなどの点が見られ、あるいは新聞社側で李光洙の原稿を翻案して掲載したのではないかという疑いも残る。だが後半になると、今度は李光洙が日本語を書き、それを新聞社の人間が朝鮮語に訳すことになる。七月十二日に李光洙が木浦で赤痢を發病して入院したあとは、李光洙が日本語原稿を書き、沈友燮が朝鮮語に訳して『毎日申報』に載せたという。⁽⁸⁰⁾

五道というのは全羅南道、全羅北道、慶尚南道、慶尚北道、江原道をさしている。⁽⁸¹⁾ 最初の計画では金剛山まで行く予定だったが、交通の便の悪さや途中の入院騒ぎもあつて金剛山はカットされ、踏破は慶州で終わった。李光洙が回つたコースは以下のとおりである。

鳥致院——公州——利仁——扶余——郡山——全州——裡里——羅州——木浦(赤痢發病、入院)——多島海——三千浦——晋州——統

營―東萊温泉―金井―海雲台―釜山―馬山―大邱―慶州

六月二十六日に汽車で京城を出た李光洙は、乗り合わせていた島村抱月・松井須磨子一行にさつそくインタビューをして第一便を書き送った。その後は行く先々で新聞社の支局員に迎えられ、地方の官公署のトップと面談してその地方の民情を紹介し、また名跡や風光明媚な場所では詩趣たつぷりの写生文を書いた。木浦では先述したように赤痢にかかって六日間入院している。

八月四日に釜山に着いた李光洙は、ここで徳富蘇峰と初めて会っている。朝鮮に来る蘇峰を釜山まで迎えに出た阿部充家が蘇峰に李光洙を紹介し、一行はステーションホテルでいっしょに朝飯を食べた。⁽⁸²⁾蘇峰と阿部と李光洙の交流はこのあとずっと続くことになる。この旅行をすることによって李光洙は文名をおおいに高め、各地の事情に詳しくなり、なによりも著名人や総督府で高い地位にある人々の知己を得た。彼は社会的なステータスを格段に上昇させたのである。八月十八日付の慶州からの便りで「五道踏破旅行記」は終了し、⁽⁸³⁾李光洙はいったん京城にもどってから九月十五日に東京に向かった。⁽⁸⁴⁾

この年、九月十一日の予定だった早稲田大学の始業式は、いわゆる「早稲田騒動」のために中止されていた。夏休み前から始まっていた学長後任問題が学生たちを巻き込みはじめ、騒ぎを恐れた学校側が始業式を取りやめたのである。学校の態度に憤激した学生たちが学校の建物に乱入して、十三日には新聞が「早大無政府」「革新団大学全部を占領」という見出しをつける事態になった。⁽⁸⁵⁾このころロシアでは二月にロマノフ朝を倒した革命が進行中であり、こんな用語が頻繁に新聞を飾っていたことも若者たちの心理に影響したのだろう。つづいて十月一日には記録的な台風が東京を直撃した。死者負傷者が数知れず、そのあとは食料品が暴騰するという騒ぎになった。東京にもどった李光洙が新たな連載小説「開拓者」の執筆に取りかかったのは、このように騒然とした雰

囲気のなかでのことだった。周囲の高揚した雰囲気は作品にも影響を与えている。「開拓者」は十一月十日から翌年の三月十五日まで連載された。

十月十七日に李光洙は、羅憲錫と許英肅が編集部員をつとめる朝鮮女子親睦会の機関紙「女子界」の編集賛助になっている。⁽⁸⁶⁾その十日後の十月二十七日、彼は青年会教育部が主催した連続三回講演会の第二回目の講師をつとめた。講師の陣容は第一回目(九月二十九日)が哲学博士元田作之進、第二回目が李光洙と早稲田騒動のために大学を辞任したばかりの大山郁夫、⁽⁸⁷⁾第三回目(十一月十日)が神学博士井深梶之助である。李光洙は、母校の教授だった大山とならんで講師をつとめるという栄誉を得て、壇上で「五道踏破旅行談」を語った。

翌十一月十七日土曜日の午後二時、早稲田大学本部応接室に学科科長と日本人留学生監督が臨席し朝鮮留学生たちが参列するなか、夏季試験で優秀な成績を取った崔斗善、李光洙、玄相允、金興濟の四人が、大学理事から総督府の賞金を手渡された。⁽⁸⁸⁾総督府からの賞金とはいえ、日本の学生と競って実力で得た成績である。さぞ晴れがましかったことだろう。この日の夜には青年会館で学友会主催の演説会があり、弁士たちはおおいに気炎をあげた。⁽⁸⁹⁾この日はまた青年会の機関紙「基督青年」が創刊された日でもある。翌十二月二十七日、学友会主催の忘年会が南明倶楽部(不明)で開かれ、参加者は三百五十名に達した。⁽⁹⁰⁾当然、李光洙も出席したことだろう。こうして「無情」と肺結核で幕を開けた李光洙の一九一七年は、輝かしい日々なかで暮れていった。

(七) 一九一八(大正七)年 ―北京への「愛情逃避」―

年があけて一月に李光洙は基督教青年会の第12回定期総会で青年会副会長になり、二月末には青年会機関紙「基督青年」の編集部員になっている。「朝鮮人概況」には、青年会が李光洙に月二十円の手当てを支給して紙面充実を依頼したと記録されており、⁽⁹¹⁾これが事実ならこの時期の「基督青年」には李光洙の手による文章が入って

いる可能性が高い。だが現存が確認されている五号(一九一八年三月号)から十三号(一九一九年一月号)には、五号に李寶鏡の名前で発表された詩「단 날 (生まれた日)」がある以外は、李光洙の文章は特定できていない。⁽⁹⁴⁾ 今後の課題としたい。

李光洙は二月末に咯血をし、許英肅の世話で彼女の恩師の診察を受けて、熱海で静養したあとといったん帰国する。⁽⁹⁵⁾ だが、この時は崔南善に会ってから三月十七日にまた東京にもどっている。⁽⁹⁶⁾ この三月に羅憲錫が東京女子美術学校を卒業している。⁽⁹⁷⁾ 許英肅も東京女子医学専門学校の卒業を七月にひかえていたが、李光洙にはまだ学業が一年残っていた。彼は許英肅にあと一年日本に留まってくれよう懇願したが拒否される。⁽⁹⁸⁾

病氣や帰国によるブランクにもかかわらず、李光洙は六月の学年末試験では優秀な成績をとって「優等で進級」をきめている。⁽⁹⁹⁾ 七月二十五日に許英肅が東京女子医専を卒業した。ひと月後、帰国する許英肅を見送って李光洙は東海道線を沼津まで行き、八月二十四日朝に彼女を送りだしたあと、近くの海水浴場の旅館で夏休みの終わりまで療養した。⁽¹⁰⁰⁾ この時期に李光洙が許英肅に出した手紙が全集に収められているので、二人が北京に駆け落ちするにいたるおおよその経過を推察することができる。⁽¹⁰¹⁾ 許英肅の母親はすでに二人の仲を知って反対していた。彼が既婚者で羅憲錫や他の女性との艶聞もあり、門閥のない貧しい青年であったことを考えれば、むしろ当然である。⁽¹⁰²⁾ 李光洙は定州にいる妻白惠順とのあいだに人を立てて離婚の話し合いをし、三年間の生活費を支払うという条件で承諾を得るが、許英肅の母親の反対は変わらなかった。九月半ばに許英肅から結婚は三年後にしようという提案があつたことが、いよいよ李光洙を不安にさせた。堪えられなくなった彼が許英肅に中国行きを提案したのが発端となつたようだ。しかし、京城で総督府の医師試験が始まつた十月二日の手紙に、金と旅行券を〇〇氏に頼んだと書いてあるのを見ると、李光洙も旅行準備はしていたようだが、文面全体に中国行きへの躊躇が感じられる。⁽¹⁰³⁾ あるいは言い出した彼の方が許英肅の実行力に引きずられたのかもしれない。十月十六日、許英肅の

医師試験合格が発表された直後、彼らは北京に「愛情逃避」した。

十一月十一日に第一次世界大戦が終結したことを知った李光洙はただちに北京を発って京城に行き、中央学校にいる玄相允と独立運動のことを相談してから日本にもどつた。玄相允が崔麟と親しいことを知っていたので、彼を通して崔麟と孫秉熙そして天道教を動かそうと考えたのだという。だが日本にもどってから大学の期末試験を受けているところを見ると、この時点で彼は亡命することになるとは思っていなかったようだ。⁽¹⁰⁴⁾ 十二月二十九日に明治会館(不明)で学友会の忘年会が開かれ、席上学生たちは独立問題に関する議論に熱をあげた。⁽¹⁰⁵⁾ 李光洙も参加していたと思われる。こうした学生たちの動きのなかで李光洙がどれほど重要な位置にあつたのかは明らかでない。李光洙は、植民地時代の文章には「朝鮮青年独立団宣言書」の起草は「与えられた任務」だったと控えめに書いているが、解放後の「나의告白」になると、冬休みに崔八鋪や宋繼白らに宣言の相談をもちかけた時はすでに宣言書は書いてあつたと、自分がイニシアティブを取つたような書き方をしている。ただ日本の警察は李光洙を中心人物とみなしていた。大正九年作成の「朝鮮人概況第三」には「在留学生中排日ノ急先鋒ニシテ且主腦者李光洙(甲号)黄相元(甲号)鄭魯湜(甲号)他数名」と、李光洙を二・八宣言の首謀者の筆頭にあげている。⁽¹⁰⁶⁾ 一月末、彼は自分が起草・英訳した独立宣言書をもって上海に亡命した。⁽¹⁰⁷⁾ 一月に大学授業料を納めていなかった彼は二月十八日付で早稲田大学から除籍され、⁽¹⁰⁸⁾ こうして李光洙の第二次留学時代は終わったのである。

(八) 結びにかえて — 「朝鮮青年独立団宣言書」 —

筆者は一九九〇年に書いた論文で李光洙の第二次留学時代の啓蒙論説を分析したが、そこでは彼が北京に行く前に書いた「新生活論」までを検討対象として、「朝鮮青年独立団宣言書」を除外した。その理由は、宣言書の内容が「その直前の著作の立場からかけ離れていて、一連の精神活動の所産とみなすのが難しい」と考えたから

である。「大邱에서」に見られる日本にすりよるかのような書き方と、「日本に対する永遠の血戦」を叫ぶ宣言書の激しい論調とのギャップにとまどった筆者は、李光洙の内部には帝国主義を肯定する「東京の世界」と健全な民族主義者としての「五山の世界」があり、宣言書は後者の突発的な噴出であって、それ以前の立場と一貫性を欠いていると考えた。⁽¹⁵⁾

だがその後、李光洙が東京に来る前にロシアで書いた記事や、亡命後に上海で書いた記事など、以前は見ることでできなかった資料を読み、また東京で李光洙を監視していた官憲資料に記録された李光洙の別の姿を知ったことで、前の意見を修正しなくてはならないと考えるようになった。⁽¹⁶⁾

この宣言書に、李光洙はそれまでの彼の経験と主張をすべて盛りこんでいる。宣言書前半部に書かれた、日本が「詐欺」と「暴力」によって朝鮮から国権を奪ってきた過程は、李光洙が幼少のころから実際に聞きつけたことである。一九〇五年十一月、日本に来てもない少年李光洙は友人たちといっしょに公使館に駆けつけ、「日本は我々を騙した」と言って泣いた。そして、そのあとも次々と実権をもち取られていく祖国の姿を見ながら陰鬱な中学時代を過ごさねばならなかった。卒業した年に五山で併合をむかえて帝国主義と力の論理を痛感し、大陸放浪の旅では中国とシベリアをさまよう同胞たちの惨めな姿に心を痛めた。武断統治で彼がもつとも憤慨したのは、日本が朝鮮人に教育をあたえず愚民のままにとどめようとしていることだった。宣言文のなかの、日本が朝鮮人に「日本に比して劣等な教育を施した」という非難は、彼が「洪水以後」への投稿文「朝鮮人教育に対する要望」でおこなった指摘であるし、「官民機関で日本人ばかりを使用して朝鮮人に職を与えず、国家生活の知能と経験を得る機会を与えようとしなかった」というくだりは、「大邱에서」で屈辱的なレトリックを使つてまで提言をせねばならなかった事由である。そして日本が「もともと人口過剰な朝鮮に無制限に移民を送りこんで朝鮮人を海外に流離せしめた」という非難は、まさに演説「我ハ生ルヘシ」において李光洙が激しく糾弾したも

のだった。宣言の最後にある決議の「日本に対し永遠の決戦を宣す」という激しさは、匿名の投稿文にあらわれていた激しさと同じく、ふだんは抑えざるをえなかった日本への憤りが噴出したためであろう。この宣言書はまさに、李光洙の第二次留学時代までの行動と主張をそのまま投影した総決算だったのである。

本稿では、一九一五年から一九一九年までの李光洙の体験をできるだけ詳細に考察した。その結果、筆者が以前おこなった「朝鮮青年独立団宣言書」に関する評価を修正することになった。別稿では本稿で調べたことを土台にして、この時期に李光洙が体験したことが「無情」をはじめとする彼の創作にどのようにあらわれているか、そして李光洙のその後の作品にどのような影響をあたえることになったのかを考察する予定である。

*本研究は日本学術振興財団の助成を受けた研究「植民地期朝鮮文学者の日本体験」(一八三二〇〇六〇)の成果の一部である。

*本稿は二〇〇八年八月二十二日にソウル大学で行なわれた韓国現代文学会における口頭発表「이광수의 제이유학에 대해서」の内容を発展させたものである。

註

(一) 李光洙小説と体験とのかかわりと論じた主要な論文には以下のものがある。金允植「李光洙와 그의 시대」한글사

一九八六／三枝壽勝「無情」における典型的要素につい

て「朝鮮学報」第一一七輯 一九八五／小野尚美「李光

洙「無情」の自伝的要素について「朝鮮学報」第二二七輯

一九八八／波田野節子は「無情」の研究」(上)(中)(下)

「朝鮮学報」一四八輯一九九三、一五二輯一九九四、一五

七輯一九九五「李光洙・「無情」の研究—韓国啓蒙文学の光と影」白帝社 二〇〇八所収)

(二) 李光洙の東京での行動と周囲の動きを年表にし、波田

野研究室HP「李光洙の第二次留学カレンダー」にアップし

てある。http://www.unli.ac.jp/~hatano/kaken/calendar.

doc

(三) ロシアにおける李光洙の活動および記事については、

崔起榮の論文「一九一四年李光洙의 러시아滞留과 文筆活動」「植民地時期民族知性과 文化運動」도서출판한을 二〇〇三 参照。『勸業新聞』は在露朝鮮人の団体勸業会の機関紙で、李光洙は一九一四年三月一日から三日まで「독립준비하시오(獨立準備をせよ)」(百号く百三号)を외배の筆名で連載した。『大韓人正教報』はチタで李鐸が発行していた大韓人国民会シベリア地方総会の機関紙で、李光洙は一九一四年六月一日の十一号に「재외 동포의 현상을 본하여 동포교육의 긴급함을(在外同胞の現状を論じて同胞教育の緊急であることを)」지사의 감회(志士の感懷)のほかに詩三編を載せている。すべて崔起榮の前掲書に収められている。崔起榮によれば、李光洙がロシアを離れたのは、ドイツのロシアへの宣戦布告によってロシアが日本と同盟を結んで領土内における朝鮮人の政治活動を禁止し、『勸業新聞』と『大韓人正教報』を廃刊したためだったという。(二五三―一五四頁)

(4) 「再び東京に行つて學業を継続する決心をして(中略)五山にもどつた」(原文朝鮮語以下、朝鮮語文の翻訳はすべて筆者による)『文壇生活三十年의回顧』『朝光』一九三六年五月号 一〇二頁 Ⅱ「多難한 半生의 途程」(このタイトルは『朝光』四月号掲載の第一回のみ)『李光洙全集』14 三中堂 一九六三 三九七頁。以下、この『李光

洙全集』を『全集』と略記する。／「學業を継続する志を抱いて本國に向かった」「나의 告白」『全集』13 二七頁(5) 三中堂が一九六三年に発行した『全集』20の年譜では五月に來日とされていたが、一九七九年に又新社が発行した『李光洙全集』十巻本の別巻年譜(別巻には奥付がないので刊行年不明)では九月に変わっている。編集の実務者である李尙畹氏に手紙で質問したところ、修正の過程は記憶にないとのことだった。

(6) 帰国後まもなく白惠順と結婚し、この年八月四日に第一子麗根が生まれている。『年譜』『全集』20

(7) 吉野作造が「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」を『中央公論』に発表したのは一九一六年一月のことである。最初に「民本主義」という用語をもちいたのは茅原華山だが、吉野との使い方とは少し違っている。

(8) 李光洙の早稲田入学二日前である一九一五年九月二十八日の『朝日新聞』に「原口鶴子女史」の死亡記事が載っている。原口鶴子(一八八六―一九一五)は日本女子大を卒業後、單身渡米してコロンビア大学大学院で心理学を学び博士号を得た。現地で原口竹次郎(早稲田文科講師)と知りあい、博士号を得た当日に結婚、帰国して二児をもうけたあととも研究をつづけたが、結核のために二十九才で夭折した。李光洙はこの女性を「여자박사」として「無情」

の中にもりこんだ。八三節で亨植と善馨の婚約が成立して米國留学の話になったとき、「女の博士もいるのかね」と尋ねる金長老に対して、亨植が「日本の女性でも米國で博士になった人が一人いましたが、昨年(原文「연전애」、平凡社の拙訳では現代語に引きずられて「数年前に」と訳している)亡くなりました」と答えているのがそれである。亨植と善馨が大学とともに学ぶ姿を、李光洙は、研究者夫婦だった原口夫妻の姿と重ね合わせていたのだろう。

(9) 朝鮮人の監督は、併合から一九一四年までは李晩奎がそのまま務め、その後は徐基殷が務めたが、以前の監督たちと違って人望がなかったという。金範洙『近代渡日朝鮮留學生史』、東京学芸大学博士論文二〇〇六 七―九頁。

監督の役目の一つは留學生たちの保証人になることだった。この時期の留學生の学籍簿を見るとその多くに保証人として監督の名前が載っている。波田野H P「韓國文学者の日本留学一覽表」参照 <http://www.unii.ac.jp/~hatalano/kaken/itiranhyo.doc>

(10) 一九一四年十一月に神田区西小川町二丁目五番地に竣工、関東大震災で焼失。現在の在日本YMCA会館とは別の場所である。

(11) 裴始美「併合」直前・後における在日朝鮮人留學生を取り巻く状況―朝鮮總督府の留學生取り締まりと「収

李光洙の第二次留学時代(波田野)

用」政策、『在日朝鮮人研究』三六号 二〇〇六 五―二三頁／波田野節子「朝鮮文学者たちの日本留学―一九一〇年代までを中心に」『植民地文化研究』第八号 二〇〇九 二四頁

(12) 一九一六年一月二十一日発行の「學之光」第七号が現存しないために、残念ながら消息欄で確認することができない。

(13) 金興済は五山学校で李光洙の生徒であり、玄相允も定州出身で李光洙と以前の知り合いだった。金允植「李光洙의 古의 時代」金出版社 一九九 五二七頁

(14) 文学者たちの日本滞在記録については、前掲波田野H Pを参照

(15) 波田野節子「『無情』を書いたころの李光洙」『県立新潟女子短期大学紀要』四五号 二〇〇八 参照

(16) 安廓「今日留學生은 何如오」『學之光』四号 一九一五年二月／無記名「日本留學史」『學之光』六号 一九一五年七月

(17) 寄宿舎は一九一二年に竣工した。武井一「趙素昂と東京留學―『東遊略抄』を中心として」、波田野研究室発行二〇〇九 三八九頁

(18) 「學之光」第八号原文 解題권보삼래「民族文化研究」通卷三九号 二〇〇九年四月 三六〇頁

(19) 「無情」のなかで李亨植が仲間と立ち上げた「京城教育会」(七〇節)は、この「朝鮮学会」をモデルにしているのではないかと思われる。

「學之光」八号の消息欄に朝鮮学会の設立は一九一六年一月二十九日とあるが、これは第一回例会の日である。「朝鮮人概況」には一九一五年十二月末日に設立されたとある。内務省は一九一六年六月に初めて「朝鮮人概況」を作成し、一九一七年五月にこれを訂正増補して「朝鮮人概況第一」、つづいて一九一八年五月に「朝鮮人概況第二」、一九二〇年六月に「朝鮮人概況第三」を出した。本稿では「朝鮮人概況」「朝鮮人概況第二」「朝鮮人概況第三」は「在日朝鮮人関係資料集成第一巻」(三一書房 一九七五)を、「朝鮮人概況第一」は「特高・警察関係資料集成第32巻」(不二出版二〇〇四)を参照した。

(20) 「學之光」十号の消息欄に、一月に設立された朝鮮学会ではすでに三度の発表があり、李光洙と盧翼根が農村問題、張徳秀が植民に關して発表したとある。文面の順序から第一回例会は李光洙の農村問題に關する発表と見てよいと思う。

(21) 前掲「民族文学史研究」通巻三九号 三六七〜三七六頁

(22) 帝釈山人という筆名については、「三国遺事」にある

神話に登場する桓因の別名から取ったという金榮敏の説(『이광수 초기 문학의 변모 과정』『현대문학의 연구』三四号、二〇〇八、一二八〜一二九頁)『이광수 문학의 재인식』소명출판二〇〇九 五二〜五三頁)のほか、五山学校が帝釈山の麓にあったことから取ったという崔珠潸の説(『이광수와 식민지 문명화론』『서강인문논총』第二十七号 二〇一〇 三七六頁、註15)がある。

(23) 김효진/김영민は最近の論文「啓蒙運動主体의 변화와 “青年”의構想」(『사』第七号 二〇〇九年十一月)で「龍洞」「農村啓蒙」「無情」の連関性を考察している。

ところで、李光洙が農業問題を研究課題としたことには、このころ「朝日新聞」に連載された農業評論家横田英夫(一八八九—一九二六)の論説「日本農村論」(十月十六日〜十一月二十五日)がきっかけとなっているのではないかと筆者は推測している。横田の「日本農村論」は日本における農業政策の歴史を尊皇愛国の立場から説き起こし、緻密な論理と統計を駆使しながら現代の農村で自作農が減り小作農が増えていることに警鐘を鳴らしたものである。一方、李光洙の「龍洞」は農村改良の報告の形式をとっているもののフィクションの要素が濃く、この二つは内容も傾向もまったく異なっている。だが横田という人物の生き方が李光洙の「舊(土)」(『東亜日報』一九三三〜三

連載)の主人公許崇を喚起させる。新進氣鋭の評論家だった横田は一九一七年に突然「正しい生活を営む唯一の道として農に帰る」と宣言して福島県で一農民となり、その後、岐阜県で農業組合の指導者として農民のために働いて三十七歳で早世した。横田の生き方が「舊」の主人公を喚起するだけでなく、彼の思想も李光洙の後期の思想と通ずるところがある。横田の手法は社会主義的な農民運動とはかけ離れたもので、尊皇愛国を遵守して小作農の現実的な生活意識に沿いつつ日常生活を軽減しようというものだった。

李光洙はこの若い知識人の人生を知っており、それが許崇という主人公造型に何らかの影響をあたえた可能性を提示しておきたい。なお「舊」については木下尚江の「火の柱」との共通点が指摘されており、李光洙も木下の名前は何度も回想しているが、横田への言及はない。横田に関する研究書としては「横田英夫試論」(網澤満昭「農の思想と日本近代」風媒社 二〇〇四)がある。

(24) 「朝鮮人概況第一」このあと経済好況のために日本在住朝鮮人の数は激増し、大正六年十二月には一四、五〇二名うち学生五八九名(「朝鮮人概況第二」「在日朝鮮人関係資料集成第一巻」六二頁)、大正九年六月現在三一、七二〇名、うち学生八二八人(「朝鮮人概況第三」前掲書八二頁)になっている。

(25) 「朝鮮人概況第一」「特高・警察関係資料集成第32巻」五七頁／「編輯所에서」「學之光」一〇号 五九頁

(26) 「學之光」九号が押収されたあと、編輯兼発行人の邊鳳現のほか張徳秀、金榮洙、盧俊泳が某所に集まって交わした会話が記録されている。誰が報告したのか不明だが、非常に具体的である。「朝鮮人概況第二」六〇頁

(27) 五号は太學社の影印本に収録されている。八号は布袋敏博が米國ワシントンの議会図書館に所蔵されているのを発見したが、これには奥付がついてなかった。布袋敏博「學之光」小考「大谷森繁博士古稀記念朝鮮文学論叢」白帝社 二〇〇二。最近、韓国内で八号の完全本が発見されて二〇〇九年四月に「民族文化研究」に全掲載された。註(18) 参照

(28) 「크리스마스밤」の筆者は「거울」となっているが、李光洙の文章であることは明らかである。金榮敏「이광수의 새 자료『크리스마스밤』연구」『現代小説研究』三六号 二〇〇七「李光洙文學の再認識」二〇〇九 소명출판にも収録／波田野節子「無情」を書いたころの李光洙「県立新潟女子短期大学紀要」四五号 二〇〇八 参照

(29) この詩のタイトルは一九一七年の「青春」九号から十一号に発表された短編小説と同じである。波田野「無情」を書いたころの李光洙 参照

(30) 執筆日付と雑誌発行日とのタイムラグから見て、このころは雑誌発行日の一ヶ月以上前に原稿を編集部に出していたと思われる。

(31) 参考までに全文を掲載する。ただしカタカナをひらがなにして句読点を加え、旧字体を新字体に改め、一部ひらがなにするなどして読みやすくしてある。「大正五年一月二十二日在東京朝鮮基督教青年会館内に開催したる学友会の主催にかかる雄弁会の席上において、李光洙(早稲田大学生)が「我ハ生ルヘシ」との題下になしたる演説中、左の言句あり。——何者といえども生きんとするには必ずや他の競争者と戦わざるべからず。戦争は残酷なれども生きんが為には必要なるのみならず当然なり。その方法と手段とは毫も問うところにあらず。遠慮なく、躊躇することなく実行すべきなり。しかるに我祖国民の現状は如何。果して生きたる国民と認むることを得るや否や。吾人はまさに生きざるべからざれども、その前途には妨碍の横わるものあり。祖国内地の殖民すなわち是なり。由来殖民又は移民なるものは、その土地広潤にして之に加うるに人口の希薄なる地域に対してのみ行わるべきものなり。しかるに祖国の如きはその疆域わずかに三千里、わが同胞の居住のみにて既に之を広しとせず。いまや祖国に移住する日本人の数はまことに少なからずして、いきおい祖国民は追われて支

那その他の方面に移住せざるべからざるの実況なり。もしそれ今日の状態をもつて推移せば、幾十年ならずして我が民族の全滅すべきは明白なり。しかして吾人の生きるということはまことに深遠なる意味あり。之を分類せば物質的に個人として生きること、団体的に生きること、国家的に生きること、世界的に生きること、宇宙的に生きることと意味するものなり。いまや祖国民の多くは物質的に個人として生きること考うるも、団体的に生きること考うるものは極めて稀なり。此の時にあたりて日本国民は陸統と我が疆土に移住し、頻りに我が民族を圧迫してあらゆる利益を壟断せんとしつつあるにも拘らず、我が民族はただ涙を吞んで住み馴れし故郷をあとに遠く山海をへだてし異郷に彷徨せるの状態は惨の惨たるものにあらずや。しかもかの官憲は毫も之に顧念するところなく、依然なんらの自由と権力とを付与することなく、以て政策宜しきを得たるものとなせり。吾人たる者、あに黙視するに忍びんや云々」

「朝鮮人概況第二」「特高・警察関係資料集成第32巻」五九頁

(32) 「第三帝国」を出していた「民本主義者」茅原華山が石原友治と分裂したあと出した雑誌。一九二六年一月に創刊し、同年六月まで通巻十四号を出した。不二出版から一九八四年に復刻版が出ている。

(33) 「洪水以後」の性格と李光洙の投稿「朝鮮人教育に対する要望」については崔珠辭の論文「제국의 근대와 식민지, 그리고 이광수—제2차 유학시절 이광수의 사상적 궤적을 중심으로」がある。『語文研究』一四〇号 二〇〇八

(34) だが匿名であつたにもかかわらず官憲はこの文章を李光洙のものと特定して報告し、おかげで彼の投稿は「嘲罵的言句」とともに記録されて後代に伝わることになった。参考までに全文を掲載しておく。ただしカタカナをひらが

なにして句読点を加え、旧字体を新字体に改め一部ひらがなにして直すなどして読みやすくしてある。「学友会機関雑誌『學之光』の編集人李光洙(甲号早稲田大学生)は、雑誌『洪水以後』第八号(大正五年三月二十一日発行)に「朝鮮人教育に対する要求」と題する記事を投稿し、ついで同年四月匿名にて「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」と題し同雑誌に寄稿したりしも、同社員は其の筋の注目を憚り、之を掲載せざりしが、其の内容は全文殆ど嘲罵的言句より成り、彼等がつねに懷抱せる所謂排日思想を羅列したるものにして、「日本人は朝鮮人に對し精神的威圧を加うるの資格なく、いたずらに武力もしくは腕力に訴えて圧倒せんとす。是れ大国民たらざるの証左なり」、「日本人は朝鮮人もしくは支那人に對し傲慢極まりなきに反し、白人種特に英國人に對する態度の卑屈さはまことに笑止に堪え

ず」、「日本の政争いは一貫せる主義に基づける主張にあらずして、一時の感情的発作に過ぎず」、「米国人または支那人、朝鮮人が日本を仇敵視して排斥する所以のものは畢竟日本人は島国根性を有し、大国民たるの資格なきに因る」などの言句を連綴し「もし日本人にして、在米同胞が支那人朝鮮人同様に、白人よりあらゆる侮辱と虐待とをうけつつあるの事実に想達せば、近親なる朝鮮人及支那人を輕侮圧倒するの不可を悟らむ。由来西洋人は宗教、文明、金錢等を以て朝鮮人を救済しおれるも、日本人は舊に朝鮮人を冷遇するのみならず、進みてその職を奪い、その資財を捲き上げて、餓死せしめんと努めつつあり。日本人は我々朝鮮人にとりてはあたかも寄生虫の如し」と結論せり。」「朝鮮人概況第二」「特高・警察関係資料集成第32巻」五七頁

(35) 春秋社 一九四八『全集』13 二八一頁

(36) 『東光』一九三二年四月『全集』16 一九三頁

(37) 大村益夫「日本留学時代の李光洙」、「朝鮮文学」紹介と研究「季刊第五号 一九七一 四五頁。大村は、哲学さえきちんと履修しておれば学年一位か二位の成績であると指摘している。

(38) 『毎日申報』と李光洙の関係については金榮敏と咸若英の二つの論文が注目される。金榮敏は、李光洙は『毎日

申報」に執筆して体制順応的な啓蒙を行うようになったと主張し、そうなる前の最後の作品として『學之光』第8号の「크리스마스밤」と「용동」に注目している。(『이광주 초기 문학의 변모 과정』註(28)書所収) また咸吉英は、総督府が『毎日申報』を通して知識青年層の支持を獲得するために、若者たちの圧倒的な人気を得ていた李光洙を利用したとしている。(一九一〇年代『毎日申報』小説研究) 延世大学大学院国語国文学科博士論文 二〇〇八)

(39) 『京城日報』朝刊 一九三九年三月十一日 大村益夫・布袋敏博『近代朝鮮文学日本語作品集』(一九三九、一九四五) 評論随筆篇3 一七頁

(40) 『京城日報』は一九〇六年九月に伊藤博文によって創刊された。当時統監だった伊藤は、日本語新聞『漢城新報』と『大東日報』を買収して自ら『京城日報』という名称を選び、別に英字新聞『セウルプレス』も発刊して、それぞれに社長をおいた。日韓併合のとき、『大韓毎日申報』を買収して『毎日申報』と改称し、最初は別会計だったが、一九一三年十月に京城日報社を合資会社にする際に合同させた。社屋は最初大和町一丁目にあったが一九一四年十一月に大漢門外看護院跡に移り、翌年焼失して再建築、一九一六年十一月一日に落成した。大正九年九月一日発行『京城日報社誌』、『社史で見る日本経済史 植民地編 第二

巻』、ゆまに書房、二〇〇一

(41) 前掲『京城日報社誌』所収「新聞売上高統計表」

(42) 「無佛翁の憶出」の冒頭で李光洙は阿部が日韓併合後初代の京城日報社長だったと書いているが、これは間違っている。阿部は、一九一三年に病氣退職してのち死亡した吉野太左衛門の代わりに社長になった。前掲『京城日報社誌』四、九頁

(43) 中村健太郎『朝鮮生活五十年』青潮社 一九六九年五四、七二頁／山崎眞雄「不平不満の噴火口」『古稀之無佛翁』阿部無佛翁古稀祝賀会発行 一九三一。この本には李光洙も文を寄せている。李光洙は彼の人柄に惹かれ、阿部が亡くなるまで東京に行けば挨拶にいく間柄だった。／『我が交遊録』(『モダン日本』一一―一九 一九四〇年八月前掲『近代朝鮮文学日本語作品集』所収) に李光洙は阿部充家のことを「稀に見る人格者でありました」、「先生が私に求めるものもなく、私から先生にお願いすることもなく、実に淡々たる交わりでありました」と書いている。

(44) 中村健太郎『毎日申報主宰』『朝鮮生活五十年』五七頁。前掲『京城日報社誌』によれば、一九二〇年現在、中村は京城日報社理事兼秘書課長で、そのほかに毎申編集局の顧問をしていた。毎申編集局の局員は十八名で中村以外は全員朝鮮人であった。

(45) 中村健太郎『朝鮮生活五十年』中村は熊本県の朝鮮語留學生として一八九九年に朝鮮に来た。李光洙も『無情』の連載を断行したのは編集局長格の中村健太郎だったと回想している。『文壇生活三十年の回顧』『朝光』一九三六年六月号 Ⅱ「多難半生の途程」『全集』14 四〇一頁

(46) 『全集』16 二七六頁「革命家の 아내」와 某家庭」参照

(47) 「그의 自叙伝」(『朝鮮日報』一九三六、七年連載)の「昇平」の章は、『毎日申報』に寄稿するようになった時期の心理を描いたものと思われる。主人公は北京で生活に窮してM新聞に投稿して認められ、続いて同紙に「真情」という小説を連載するが、T(申丹齊)をさすと思われる)には詰問され、同胞の若者たちから襲撃を受ける。『全集』9 三八六、四二九頁

(48) 李光洙が阿部と会っているころ、東京では『學之光』十号(九月四日発行)が四号ぶりに刊行されている。編輯兼発行人は邊鳳現で、李光洙の文章は掲載されていない。

(49) 一九一六年九月二十二日、二十三日掲載／『全集』18 二〇六、九頁

(50) 事件は九月四日に発生し、『毎日申報』一九一六年九月六日、七日、八日、十日、十二日に記事が載っている。

(51) この住所は、現在の高田馬場一丁目にある映画館、早

李光洙の第二次留学時代(波田野)

稲田松竹の裏である。「東京雑信 四、学生界の体育」に「余の宿所は早稲田大学の運動場に近く」とあるが、実際はそれほど近くではない。運動場の脇を通って通学していたのではない。

(52) この号は布袋敏博が米国ワシントンの議会図書館で八号と同時に発見した。ただし、李光洙の作品はすべて『全集』に収録されており、「為先獻가 되고 然後에 이되라」は『全集』20に収録されている。

(53) 「文壇生活三十年の回顧」『朝光』一九三六年五月号 Ⅱ「多難半生の途程」全集14 三九九頁

(54) 一九三二年二月『三千里』『全集』16 二六八頁

(55) 一九三七年一月『三千里』『無情』等全作品을 語하 다『全集』16 三〇〇頁

(56) 「나의 四十半世紀」『新人文』八月号 一九三五 一八頁

(57) 波田野節子「洪命憲が東京で通った二つの学校」『朝鮮近代文学者と日本』科研成果報告書二〇〇二 5. 学生生活の費用 一三頁／週刊朝日編『値段の風俗史 下』朝日文庫一九八九 下宿料金 四七七頁

(58) 早稲田大学(文科)の授業料は、明治四十五年に五十円、大正八年に五十五円だったが、大正九年に七十五円、大正十一年に百十円と、このころから急激に値上がりをは

じている。前掲『値段の風俗史 下』四四七頁／『早稲田大学規則便覧』五六頁(大正四年改正)

(59) 大正五年八月『早稲田学報』の特待生の欄に李光洙の名前はない。そもそも大学進学時に入学生に対して特待制度があったのかどうか不明である。大正六年八月の『早稲田学報』と七月の『學之光』十三号の消息欄には李光洙が特待生になったことが記されている。

(60) 波田野節子訳『無情』二四節 平凡社 二〇〇五八頁

(61) 当時の新聞広告による。なお李光洙が投稿した雑誌『洪水以後』は増刊号が二十五銭、普通は十銭強であった。

(62) 註(47)でも指摘したように、『그의 自叙伝』(『朝鮮日報』一九三六〇七年連載)の「昇경」の章は、この時期の李光洙の心理を描いたものと思われるが、主人公がM新聞に投稿し続いて同紙に『眞情』という小説を連載した理由は経済的な逼迫であった。

(63) 李光洙にとって原稿料の額は非常に印象だったようだ。一九三二年の「나의 最初の 著書」では、最初は五円だった『無情』の原稿料が終わることに十円だったと回想し(『三千里』一九三二年二月 全集16 二六八頁、一九三六年の「文壇生活三十年의 回顧」では、「東京雜信」で毎月五円、『無情』「開拓者」で毎月十円と回想(『朝光』

一九三六年五月号 全集14 三九八頁)、そして翌年の『無情』等全作品을 語하다」でも『無情』のときは月五円だったのに『開拓者』のときは四倍に暴騰して一躍二十円になったと語っている(『三千里』一九三七年一月 全集16 三〇〇頁)。

(64) 波田野節子『「無情」の研究』三〇八〜三二〇頁 参照

(65) 『이광수와 그의 시대』舍出版社 一九九九 六〇四頁

(66) 金允植は『이광수와 그의 시대』で「彼の最初の発病は一九一七年四月ころで、二度目が一九一八年四月ころである(前掲書 六三四頁)と書いているが根拠は明らかにしていない。

(67) 『文藝公論』創刊号 一九二九 六二頁 『全集』未収。一九一七年度は学校年度ではなく単に一九一七年をさすと思われる。

(68) 『三千里』一九三二年二月 『全集』14 三五〇頁

(69) 「少年의 悲哀」は(一九一七、一、十朝)、「尹光浩」は(一九一七、一、一夜)、「彷徨」は(一九一七、一、一七、東京麹町에서)と、末尾に記されている。

(70) 前掲『文藝公論』創刊号 六二頁

(71) 『學之光』十二号消息欄。帰国した張徳秀はそのあと上海に行つて新韓青年党に加わった。李光洙は二・八宣言

書の英訳をもって上海に着いたとき、日本に向かう彼とすれちがっている。

(72) 李光洙は二月下旬から活動を再開したと思われる。

『學之光』十二号(四月十九日発行)には、二月二十二日の誕生日に書いた「二十五年을 回顧하야 愛妹에게」のほか、論説「天才야! 天才야!」と「婚姻에 對한 管見」を発表しており、二年ぶりに再刊された「青春」七号(五月十六日発行)には随筆「거울과 마조 안자」詩「어린아이」を発表している。

(73) 「朝鮮人概況第二」六四頁／『學之光』十三号消息欄

(74) 一九一二年の学年末試験は六月四日から六月十四日までだった。(山本一蔵日記『早稲田大学百年史第二卷』早稲田大学発行一九八一 六六九頁。五年後の一九一七年も、学歴はさほど変わっていないと思われる。学年末試験を終えた李光洙は六月十八日夜に『學之光』の原稿「卒業生諸君에게 贈이는 懇告」を書きおえたのち朝鮮に向かっている。七月二十六日発行の「青春」九号に掲載される「어린 벗에게 (第一・二信)」は一ヶ月前に崔南善の手に渡っていないことはないが、これは李光洙がソウルに着いたころということになる。このあと李光洙は五道踏破旅行に出て八月十八日まで旅行を続けている。この旅はハードで途中入院もしているので紀行文以外の執筆は難しかった

たはずである。それゆえ九月二十六日発行の「青春」十号の「어린 벗에게 (第三信)」の原稿は東京で書かれて第一信と一緒に崔南善の手に渡ったと考えるのが自然である。最終回の「어린 벗에게 (第四信)」が掲載された「青春」十一号は十一月十六日の発行なので、李光洙が東京にもどつてから書いた可能性は排除できないが、この時期に彼はもう「開拓者」に取りかかっている。筆者としては、李光洙は「어린 벗에게」を『無情』の執筆を終えてから朝鮮にもどるまでの間に全編を執筆したと考えている。

(75) 波田野節子訳『無情』平凡社 四四七頁

(76) 李光洙が五道踏破旅行に出ることになったとき、許英廟は旅行が可能かどうかを恩師に頼んで診てもらい、大丈夫という結果を得て送り出した。ところが彼が木浦で赤痢にかかって入院したと聞いて、肺結核が再発したと勘違いし、行かせてしまったことを後悔したという。そのために愛がさらに深まったと、彼女は回想している。「春園病床訪問記」、前掲『文芸公論』創刊号／「나의 自叙伝 一代의 文豪春園의 愛人」『女性』一九三九年二月 二六〇二七頁

(77) 「夏休みを利用して始政五年民情視察の朝鮮行脚をして呉れないかと云ふことを、當時毎日申報の監事であった中村健太郎氏から、書簡で、東京に居る私に云つて来られ

た)「無佛翁の憶出(1)——私が翁を知った前後のこと」
『京城日報』一九三九年三月十一日『近代朝鮮文学日本語作品集1939』1945評論・随筆篇3)一八頁

(78)『毎日申報』一九一七年六月十六日 一面

(79) 李光洙「無佛翁の憶出(1)」(註74)参照。一九三九年八月刊行の単行本『半島江山』の序文にも同じ記述がある。『全集』16 三二五頁

(80) といえ、日本人(おそらく中村健太郎)によるネイティブチェックは受けていたと思われる。『五道踏破旅行記』に日本語版と朝鮮語版があることを最初に指摘したのは布袋敏博である。布袋は、沈友燮が朝鮮語に訳したものは一部だけだったと推論している。「李光洙『五道踏破旅行記』小考」朝鮮語版と日本語版の比較研究(二〇〇三年度第五十四回朝鮮学会)／『五道踏破』執筆手記の李光洙(韓国現代文学会二〇〇八年第三次全国学術大会)。現在「李光洙全集」に収められている朝鮮語版『五道踏破旅行記』は、『五道踏破旅行記』と『金剛山遊記』をあわせて一九三九年に永昌書館から刊行した『半島江山紀行文集 春園李光洙傑作集第一巻』に収録されたものである。その序文で李光洙は崔貞熙が全体を見直して文体を統一したと書いている。『全集』16 三二五頁

(81)『金剛山遊記』動機一九二四年十月単行本『金剛山

遊記』所収『全集』19 三三九頁。この十五年後に書かれた『半島江山』序文では「忠南・全北・全南・慶南・慶北」になっているが、記憶の新しい点から見て『金剛山遊記』動機の方が正確ではないかと思われる。

(82) 李光洙「無佛翁の憶出(2)——斎藤総督と霊犀相通じた翁」『近代朝鮮文学日本語作品集』一八頁

(83) 慶州からの便りは九月十二日の『毎日申報』に掲載された。

(84)『毎日申報』一九一七年九月十五日

(85)『東京朝日新聞』一九一七年十月十三日

(86)『女子界』二号(一九一七年三月二十二日発行) 消息欄。会長 金瑪利亞、総務 羅憲錫、編集部長 金徳成、同部員 許英肅・黄愛施徳・羅憲錫、同賛助 田榮澤・李光洙。なお資料を提供してくれた芹川哲世氏にこの場を借りてお礼を申し上げる。

(87)『學之光』一四号消息欄では「早大教授」とされているが、大山は大学騒動のさなかの九月に辞表を提出している。彼はこのあと大阪朝日新聞に入社した。

(88)『早稻田学報』大正六年十二月号／『學之光』一四号消息欄

(89) この日の雄弁会は「学生風紀問題大演説会」で、多数の聴衆を集めた『學之光』一四号消息欄にある。また「朝

鮮人概況第二」には宋繼白、李琮根、張徳俊の過激な演説内容が記録されている。『在日朝鮮人関係資料集』七二〜三頁

(90)『學之光』一五号 消息欄／「朝鮮人概況第二六六、七四頁

(91)「大正七年二月末李光洙(甲号)二月手当二十円ヲ給シテ編輯部員ニ加ヘ一面同誌ノ内容ヲ充実セシムルコトトシタル」『朝鮮人概況第二六九頁

(92)『基督青年』の複写を下さった東京YMCAの田附和久氏と延世大学の金榮敏教授にこの場を借りて感謝の意を表する。なお『基督青年』に関しては以下の論考がある。

小野容照「福音印刷合資会社と在日朝鮮人留學生の出版史(一九一四〜一九二二)」『在日朝鮮人史研究』第三九号二〇〇九年十月／이철호「一九一〇年代後半東京留學生の文化認識と実践——『基督青年』을 中心으로」『韓国文学研究』第三五集 二〇〇八下半期

(93)「廿二」は二月二十二日に二十六歳の誕生日を迎えて書いた、亡き父母を慕う詩である。全集には収録されていない。

(94)「秋湖」「句離瓶」「豆割叫生」「秋峯」などの筆名の詩や記事があるが、これはそれぞれ田榮澤、朱耀翰、洪蘭坡、召영만とみなされる。金允植「文人筆名一覽表」『韓国現

李光洙の第二次留学時代(波田野)

代文学年表』附録1 文学思想社 一九八八。ただし召영만については註(92)の이철호論文の註33を参照のこと。

(95) 前掲「春園病床訪問記」での許英肅の回想。許英肅はこのとき、咯血は五道踏破旅行の二年後で、咯血のあと李光洙は学校をやめて朝鮮にもどったと回想しているがその事実はない。記憶違いであろう。

(96)『青春』十三号(一九一八年四月十六日発行)掲載の「病友會」で崔南善は、李光洙は熱海に転地療養をしたあと診療上の必要から暫時朝鮮に来て三月十七日にもどったと書いている。「文壇生活三十年の回顧」でも「こうしているうちに健康がますます衰え、卒業の一年前にいったん朝鮮に帰ってきたが、静養する余裕もなくふたたび東京に行つて学業を継続し(後略)」とある。『朝光』一九三六年五月号 全集14 四〇一〜四〇二頁

(97) 羅憲錫は四月十四日に神田錦町の松本楼で開かれた学友会主催の卒業生祝賀会に出席したあとに帰国したのではないかと思われる。

(98) 一九一八年七月二十三日付手紙 全集18 四四五頁

(99)『學之光』十七号消息欄。「優等で進級」とあるが特待生ではない。特待生の学費免除が卒業までの特典かどうかは不明。

(100) 手紙の内容からして、静岡県沼津市大諏訪か小諏訪だ

と思われる。

- (101) 『全集』18所収 「사랑하느 許英肅에게 東京에서」
 (102) 一九一八年九月十二日付(推定) 許英肅の母親へ送った三度目の手紙。『全集』18 四六三〜四六五頁
 (103) 一九一八年九月三日付手紙 『全集』18 四五二頁
 (104) 一九一八年九月十三日(推定) 付手紙 『全集』18 四五六〜四五八頁
 (105) 私信で名前を隠す必要はないので、全集を編纂するさいに日本人名をはばかって〇〇に直したのではないかと思われる。〇〇氏が誰かは不明だが、李光洙にこのころ入金のあるとすれば『毎日申報』の原稿料くらいしか考えられない。この時期には論説「新生活論」が連載されているので阿部充家中村健太郎の可能性が高い。
 (106) 一九一八年十月二日付手紙 『全集』18 四六一〜四六二頁
 (107) 朴啓周の評伝「春園李光洙」(三中堂 一九六二)は創作の要素が濃く、どこまで信憑性があるのか疑わしい。たとえば許英肅は北京の山本病院の医師をしている牛込女專の同期生「永井花子」を頼っていったというが、許英肅の同期生にこの名前は見あたらなかった。とはいえ朴啓周は許英肅から直接に話を聞いて書いたようであり(「許英肅はその時のことを述懐しながらおもしろく苦笑した」二二

九頁など)、二人が瀋陽まで逃げたところで追ってきた親戚につかまって一度は京城にもどり、再度駆け落ちをしたという細部には迫真性がある。おそらく実行力のある許英肅がこうした行動では主導権をとったのだろう。

- (108) 『全集』年譜
 (109) 北京から東京での動きまでについては李光洙自身の回想「나의告白」の「己未年과 나」以外に参考になる資料は見つからなかった。『全集』13 二三八〜二二九頁
 (110) 「朝鮮人概況第三」『在日朝鮮人関係資料集成第一巻』九八頁
 (111) 「上海の二年間」『三千里』一九三二年一月
 (112) 「朝鮮人概況第三」『在日朝鮮人関係資料集成第一巻』八六頁
 (113) 「朝鮮人概況」に「大正八年一月三十日北京ニ赴クト称シテ東京ヲ出発シタリ」(八六頁)とある。「上海の二年間」では翻訳をした日が二月一日(ネイティブチェックについては言及なし)で上海到着の日が二月五日に、また「나의告白」では上海到着は一月末になっている。「全集」年譜は二月五日にしている。ところで宣言文英訳のネイティブチェックをしてくれたのは明治学院時代の恩師ランデイス先生だったが(「나의告白」『全集』13 二二九頁)、明治学院の名物教師だったアメリカ人宣教師ヘンリー・モ

ア・ランデイスは、この二年後の一九二一年九月に急死している。(『明治学院同窓会誌』「ランデイス先生特集」一九二一年十二月／「明治学院人間百年史」『白金学報』八九号 一九七三年十二月)

- (114) 二〇〇八年八月十八日早稲田大学教務部長発行の調査結果報告書に「大正八年二月十八日 都合未納除名の記載あり」とある。調査申請に協力してくださった李光洙の次女李廷華氏に、この場を借りてお礼を申し上げる。

- (115) 「李光洙の民族主義思想と進化論」『朝鮮学報』第二三六輯 一〇七頁。「李光洙・『無情』の研究」白帝社 二〇〇八所収

- (116) 金允植は宣言文の起草主体は李光洙個人ではなく当時の東京留学生が共有していた世界観であったと見(이광

수와 그의 시대」六八三頁)、鄭明煥は李光洙の二・八から上海臨政参加にいたる行動そのものを民族の一員としての突発行動と見ている。(「李光洙의 啓蒙思想」『李光洙研究(下)』二六四頁)

- (117) 「二・八宣言書」と第二次留学時代における李光洙の思想とを系統的に把握した論文としては、崔珠潸の「제국의 근대와 식민지, 그리고 이광수—제2차 유학시절 이광수의 사상적 궤적을 중심으로」がある。『語文研究』第一四〇号 二〇〇八 第4章 参照

- (118) 「나의告白」『全集』13 一八八頁

- (119) 「朝鮮青年独立團宣言書」は金源模「영마루의 그림」にある李光洙直筆の宣言の複写を参照した。(「영마루의 그림」단국대학교출판부 二〇〇九) 六七〜七〇頁

(新潟県立大学教授)